透析施設における補助犬使用者の受け入れ状況

三浦 靖史^{1, 2)}、小林 彩恵子²⁾、上田 麻紗子²⁾、岸本 美穂²⁾、橋本 裕美²⁾、
今田 泰裕²⁾、藤井 貴広²⁾、大槻 史奈²⁾、豊田 行健²⁾、石川 智昭¹⁾

1) 神戸大学大学院保健学研究科リハビリテーション科学領域

2) 神戸大学医学部保健学科

A Survey of Circumstances Regarding Service Dog Users in Dialysis Facilities

Yasushi Miura^{1, 2)}, Saeko Kobayashi²⁾, Masako Ueda²⁾, Miho Kishimoto²⁾, Hiromi Hashimoto²⁾,
Yasuhiro Imada²⁾, Takahiro Fujii²⁾, Fumina Otsuki²⁾, Yukihiro Toyota²⁾, and Tomoaki Ishikawa¹⁾

1) Department of Rehabilitation Science, Kobe University Graduate School of Health Sciences

2) Faculty of Health Sciences, Kobe University School of Medicine

抄 録

背景：2011年に実施した病院における補助犬の受け入れ状況に関する調査で、兵庫県の2病院から透析室に補助犬を同伴可能であるとの回答があった。そこで、本調査では、透析施設における補助犬使用者の受け入れの現状を調査し、受け入れに関する課題について検討した。

方法：2012年11月に、兵庫、福岡、千葉の3県の444透析施設（兵庫145、福岡162、千葉137）の透析室担当看護師長を対象に、補助犬に関するアンケート調査を郵送で実施した。

結果：回収率は62.4%（277施設）であった。補助犬利用者を受け入れたことがある透析施設は3.6%（10施設）で、うち6施設では透析室のベッドサイドに補助犬を同伴可能であった。地域別では、兵庫4施設（4.5%）、福岡1施設（1.0%）、千葉5施設（5.9%）で、施設の内訳は病院が4施設、クリニックが6施設で、受け入れたことがある補助犬は全て盲導犬であった。マニュアルを使用していたのは全体の1.8%（5施設）、話し合いを行っていたのは5.4%（15施設）で、89.2%（247施設）では補助犬使用者の来院を想定した準備を実施していなかった。身体障害者補助犬法の認知度は54.1%（150施設）であった。

考察：限られた施設数ではあるが、透析室のベッドサイドに補助犬を同伴して透析を受けることができる施設が存在することが明らかになった。また、同伴された補助犬は全て盲導犬であったことから、網膜症と腎症を併発している糖尿病患者が盲導犬を使用して透析施設に通院していることが考えられた。

結論：透析施設を含む全ての医療機関において、補助犬使用者の受け入れ対策を積極的に実施する必要がある。

キーワード：補助犬、身体障害者補助犬法、血液透析、リハビリテーション、バリアフリー

Abstract

Objective: We reported that two hospitals in Hyogo Prefecture accommodated service dogs in the dialysis facilities according to the survey in 2011. In this study we therefore surveyed the circumstances relating to service dogs in dialysis facilities.

Method: Questionnaires were sent out to the head nurses at 444 dialysis facilities in three prefectures (145 in Hyogo, 162 in Fukuoka, and 137 in Chiba) in November 2012.

Results: Collection rate was 62.4% (277 facilities). Ten dialysis facilities (3.6%) had experienced visits of service dog users, and six of them allowed service dogs at the bedside. By region, 4 facilities were located in Hyogo (4.6%), 1 in Fukuoka (1.0%), and 5 in Chiba (5.7%). By category, 4 facilities were hospitals and 6 were clinics. All the service dogs reported were guide dogs. Only 1.8% (5 facilities) had compiled a manual and 5.4% (15 facilities) had discussed the acceptance of service dogs. In contrast,

89.2% (247 facilities) had never prepared for a possible service dog visit. The law concerning assistance dogs for the disabled was acknowledged in 54.1% (150 facilities).

Discussion: It was found that a handful of dialysis facilities accepted service dogs at the bedside. Retinopathy and nephropathy associated with diabetes mellitus may be a reason why all the service dogs reported were guide dogs.

Conclusion: All medical facilities including dialysis facilities should prepare for the visits of service dog users proactively.

Keywords : service dogs, law concerning assistance dogs for the disabled, hemodialysis, rehabilitation, accessibility

I. 序論

身体障害者補助犬（以下、補助犬）は、身体障害者の自立と社会参加に役立つ生きた自助具である。補助犬を使用する身体障害者の施設等の利用の円滑化を図った身体障害者補助犬法（以下、補助犬法）が2002年10月に施行されて約11年が経過したが、補助犬と補助犬法は十分に社会で認知されておらず、補助犬法で受け入れ義務が課されている公共施設や公共交通機関、医療機関¹⁾においても補助犬の受け入れを拒否された事案が未だに報告されている²⁾。

これまでに我々は、2008年秋に兵庫県の病院を対象とした補助犬の受け入れ状況調査³⁾と、2011年秋に病院での補助犬の受け入れ状況の兵庫県と福岡県との比較調査⁴⁾及び、兵庫県における3年間での経時的変化の調査⁴⁾を実施した。その結果から、補助犬利用者の病院への来院は増加しており、医療従事者は受け入れに不安に感じていたが、実際の受け入れに際して大きな問題は生じておらず、一方で、2/3の病院は補助犬使用者の来院を想定した準備を行っていなかったことから、予め準備しておくことにより不安なく受け入れができると考えられた⁴⁾。また、2011年の調査で、透析室へ補助犬を同伴できる病院が1.6%（兵庫県の2病院）存在することが明らかとなった⁴⁾。

医療機関は、身体に障害を有する補助犬使用者にとって体調管理や疾病治療のために利用することが必須な施設であるが、特に人工透析を実施している腎不全の患者は、通常週に3回、定期的に透析施設に通院する必要がある、補助犬使用者が補助犬を同伴して通院できるかは重要な意義を持つ。

そこで、本研究では、透析施設における補助犬利用者の受け入れ状況を、近畿、九州、関東の各地区において、人口規模と透析施設数がほぼ同程度である兵庫県（人口5,588,133人⁵⁾、145施設）、福岡県（人口5,071,968人⁵⁾、162施設）、千葉県（人口6,216,289人⁵⁾、137施設）の透析施設に対して、アンケート調査を実施することにより、透析施設における補助犬利用者の受け入れにおける課題を明らかにして、透析施設を含む医療機関における円滑な補助犬受け入れを促進するための方法について検討した。

II. 方法

1. 調査期間、調査対象および倫理的配慮

表1 兵庫県、福岡県、千葉県の人口、補助犬数、透析施設数、アンケート回答率

	兵庫県	福岡県	千葉県	合計
人口(推計)	5,588,133人	5,071,968人	6,216,289人	
補助犬数	62頭	26頭	40頭	128頭
盲導犬	56頭	24頭	36頭	116頭
介助犬	5頭	1頭	2頭	8頭
聴導犬	1頭	0頭	2頭	3頭
透析施設数	145施設	162施設	137施設	444施設
アンケート回答率 (回答数)	61.4% (89施設)	63.6% (103施設)	62.0% (85施設)	62.4% (277施設)

N.S.: not significant

2012年11月の1ヶ月間に、透析施設に対して郵送によるアンケート調査を実施した。調査対象は、2010年度版日本透析医学会施設会員名簿⁶⁾に記載された、兵庫145施設、福岡162施設、千葉137施設の合計444施設とした。回答者は、看護部長あるいは外来看護師長に依頼した従来の調査と異なり^{3,4)}、透析室内の状況を最も良く把握していると考えられる透析室担当看護師長に依頼した。アンケートは回答者名と施設名については無記名として、全体の結果のみを解析して個々の施設についての解析や公表を行わないことを明記した上で、アンケート参加への同意が得られる場合に返送を依頼した。

2. 調査内容及び解析方法

2008年及び2011年に実施した医療機関における補助犬受け入れ状況調査^{3,4)}を基本として、透析中の補助犬の待機場所に関する質問項目などの変更を加えて、医療機関を対象とした19項目と、回答者個人を対象とした5項目の計24項目について、主に選択回答方式による質問を行った（表1）。アンケートの回答を集計し、群間での相違についてはピアソンのカイ二乗独立性の検定を用いて検討した。

III. 結果

1. 調査対象3県の背景

2012年11月の調査時点で、兵庫、福岡、千葉の3県の人口及び調査対象透析施設数は近似していた（表2）。しかし、補助犬数は、兵庫62頭、福岡25頭、千葉40頭であり⁷⁾、施設当たりの補助犬数は兵庫と千葉では有意差はなかったが、兵庫、千葉ともに福岡より有意に多かった（表2）。アンケートを依頼した3県の444の透析施設のうち277施設から回答があり（回答率62.4%）、県による回答率の相違を認めなかった（表2）。

2. 補助犬使用者の透析施設への来院状況

表2 アンケートの質問項目一覧

透析施設に関する質問

- ① 今までに補助犬使用者が透析のために通院したことがありますか？
- ② その補助犬の種類は何ですか？
- ③ 補助犬使用者が来院したときに何か困ったことはありましたか？
- ④ 困ったことがあった場合、それは具体的にどのようなことでしたか？
- ⑤ 補助犬使用者が来院した場合、円滑に対応できると思いますか？
- ⑥ どうしてそのように考えられたのですか？
- ⑦ 補助犬使用者の通院にあたり、あるいは補助犬使用者の通院を想定して何かされたことはありますか？
- ⑧ 補助犬使用者の来院について心配なことはありますか？またそれは具体的にどのようなことですか？
- ⑨ 補助犬使用者が透析に来院された場合、補助犬はどこまで入室が可能ですか？
- ⑩ 補助犬対応マニュアルは整備されていますか？
- ⑪ 病院の施設は補助犬使用者が利用しやすいものになっていますか？
- ⑫ 現在の病院施設で改善すべきだと思うところはなんですか？
- ⑬ 施設には「補助犬同伴可」の標識が目につくところに掲げられていますか？
- ⑭ 来院者への啓発活動として院内に補助犬に関するポスターなどの設置をしていますか？
- ⑮ 身体障害者補助犬法が施行された2002年以降に補助犬を同伴しての通院を断ったことはありますか？
- ⑯ その理由は具体的に何ですか？
- ⑰ 補助犬使用者が補助犬を同伴して施設に通院するときに、補助犬使用者にお願いしたいことは何ですか？
- ⑱ 施設について教えてください
- ⑲ 病院の所在地を教えてください

回答者に関する質問

- ① 補助犬のことについてこのアンケート以前から知っていましたか？
- ② 身体障害者補助犬法について知っていましたか？
- ③ 補助犬と、補助犬の接し方について他の職員や来院者に説明することができますか？
- ④ 補助犬同伴可の標識を知っていましたか？
- ⑤ 今までにこの標識を掲げている施設を見たことがありますか？(あなたの病院以外の施設で)また、見た場所はどこですか？

a. 回答があった透析施設の内訳

b. 補助犬使用者の来院状況

c. 来院があった施設の内訳

	兵庫	福岡	千葉	全体
病院	0	1	3	4
クリニック	4	0	2	6
合計	4	1	5	10

d. 来院があった補助犬の種類

盲導犬	10
介助犬	0
聴導犬	0
合計	10

図1 補助犬使用者の透析施設への来院状況

a. 回答があった透析施設の内訳、b. 補助犬使用者の来院状況、c. 来院があった施設の内訳、d. 来院があった補助犬の種類

アンケートに回答のあった透析施設のうち、全体の49.5% (137施設) が外来透析患者を受け入れている病院、46.2% (128施設) が外来透析専門のクリニックであり、それぞれが全体のほぼ半数ずつを占めた (図1a)。補助犬使用者が透析のために通院したことがある透析施設は全体の3.6% (10施設) であり (図1b)、補助犬使用者の受診経験のない施設が全体の96.0% (266施設) と大部

分を占めていた。施設の種類の、病院が4施設 (福岡1、千葉3)、クリニックが6施設 (兵庫4、千葉2) で、地域別では、兵庫4施設、福岡1施設、千葉5施設であった (図1c)。なお、来院した補助犬の種類は、全て盲導犬であった (図1d)。

3. 透析施設において補助犬を同伴して入室可能な範囲
補助犬が施設内のどこまで入室可能かという質問に対

補助犬を同伴して入室可能な範囲

図2 補助犬を同伴して入室可能な範囲

a. 補助犬使用者の来院を想定した準備状況

b. 補助犬対応マニュアルの準備状況

図3 透析施設における準備状況

a. 補助犬使用者の来院を想定した準備状況、b. 補助犬対応マニュアルの準備状況

し、透析室内への同伴が可能と回答した施設は10.5% (29施設) であった (図2)。一方、明確な決まりはないと回答した施設が42.2% (117施設) と最も多く、次いで入室可

能範囲についてわからないと回答した施設が34.7% (96施設) で、両方で約3/4を占めた。透析室内への同伴が可能と回答した施設の62.1% (18施設、全体の6.5%)

a. 補助犬同伴可標識の掲示

b. 補助犬ポスター掲示等の来院者への啓発活動

図4 透析施設における補助犬の啓発活動

a. 補助犬同伴可標識の掲示、b. 補助犬ポスター掲示等の来院者への啓発活動

は透析室内のベッドサイドに、37.9%（11施設、全体の4.0%）は透析室内のベッドサイド以外の一定の場所に、それぞれ補助犬の待機場所を設けていた。

なお、補助犬使用者の通院を受け入れた経験のある10施設での内訳は、透析室内のベットサイドが6施設、待合室が1施設、明確な決まりはないが2施設、その他として院外と回答した施設が1施設であった。

4. 透析施設における補助犬使用者来院への準備状況

全体の89.2%（247施設）と大多数の施設では、補助犬使用者の通院を想定した準備を特に何もしていなかった（図3a）。一方で、受け入れ準備として、補助犬対応マニュアルを作成あるいは導入した施設は1.8%（5施設、うち3施設は受け入れ経験あり）、職員で対応の仕方について話し合った施設は5.4%（15施設、うち7施設は受け入れ経験あり）、犬のトイレなどの設備を整えた施設は1.4%（4施設、うち3施設は受け入れ経験あり）であり、主に補助犬使用者の受け入れを経験している透析施設で準備が行われていた。

5. 透析施設における補助犬対応マニュアルの準備状況

補助犬対応マニュアルを作成あるいは導入していた5施設（全体の1.8%）のうち、3施設では院内でマニュアルを作成し、2施設では他で作成されたマニュアルを導入していた。6.9%（19施設）では今後検討する予定であったが、88.8%（244施設）と大多数はマニュアルの準備について検討する予定がなかった（図3b）。

6. 透析施設における補助犬の啓発活動

補助犬同伴可の標識を掲示している透析施設の割合は全体の3.6%（10施設）であった（図4a）。兵庫では5.6%と、2008年の兵庫県の病院を対象とした調査の8.3%³⁾、同じく2011年の12.4%⁴⁾と比較して、透析施設における標識の掲示は低い割合に留まっていた。

同様に、補助犬ポスター掲示などの来院者への啓発を実施している施設は全体の3.6%（10施設）のみであったが、福岡では1施設も行っていなかった（図4b）。全体の9割を超える施設ではいずれの掲示も行われていなかった。

7. 透析施設の医療従事者による補助犬法及び補助犬の認知度

回答した透析施設の医療従事者の約半数が補助犬法を知っていたが、補助犬法の内容まで知っていたのは、全体の5.4%に過ぎなかった。また、各補助犬について、盲導犬は全体の93.1%が認知していたが、介助犬は77.3%、聴導犬は29.6%であり、1.8%は補助犬について全く認知していなかった（図8a）。各県での補助犬法及び補助犬の認知度に、有意な相違は認めなかった。

IV. 考察

補助犬使用者を受け入れている透析施設あるいは症例の報告は散見されるが^{8,9,10)}、初めて県単位で実施した今回の調査の結果、対象となった3県には、補助犬使用者の通院を経験している透析施設が10施設あり、同伴さ

a. 補助犬法の認知度

b. 補助犬の認知度

図5 補助犬法及び補助犬の認知度

a. 補助犬法の認知度、b. 補助犬の認知度

れていた補助犬は全て盲導犬であることが新たに明らかになった。この理由としては、介助犬や聴導犬と比較して盲導犬の頭数が桁違いに多いことと、腎障害と視覚障害を併発する糖尿病が要因として考えられた。本邦において透析導入の第1位の原因疾患である糖尿病は、重大な合併症として糖尿病性腎症と、糖尿病性網膜症を併発する¹¹⁾。前者は慢性腎不全を引き起こすために透析が、後者は視覚障害を引き起こすために盲導犬が必要となる場合がある。

通常、人工透析患者は週3回、透析施設に通院する必要があるため、補助犬を同伴することにより通院が自立できることの意義は、障害者の社会参加の観点からも大きい。また、通院の道中に加えて、透析を受けている間にも、補助犬による支援が必要となる事態も生じ得ることから、すぐに対応できるように、補助犬が透析ベッドのすぐそばで待機できるように待機スペースを準備することが望ましい。実際、補助犬を同伴しての通院を受け入れている10施設のうち6施設が、透析室内のペットサイドを補助犬の待機場所としていた。

現在、本邦には約30万人の人工透析患者が存在するが¹¹⁾、補助犬数が3種類合わせて1,200頭ほどであることを鑑みると、今回の調査で補助犬使用者の通院を経験した透析施設が3.6%で、大部分の施設は経験がなかったことは妥当な結果と考えられる。他方、透析を受けて

いる補助犬使用者が少なからず存在していることが明らかになったことから、他の医療機関と同様に透析施設も、予め、補助犬使用者の受け入れ準備を行っておく必要がある。

しかし、これまでの病院を対象とした調査と同様に、透析施設においても、補助犬対応マニュアルの整備を初め、補助犬使用者受け入れに対して特に何も行っていないとの回答が大多数を占めた。受け入れ経験がある施設では準備が行われている割合が高いことから、受け入れに合わせて準備がされていることも考えられるが、日頃から、職員と他の施設利用者に補助犬に関して啓発を行っておくことが、実際に補助犬使用者の来院があった場合の円滑な対応に繋がるであろう。

ところで、施設内での話し合いや啓発を実施するには、補助犬対応マニュアルの活用が有用と考えられるが、補助犬マニュアルを作成あるいは導入している割合は、これまでの病院を対象とした調査⁴⁾と同様に低かった。このことには、補助犬対応マニュアルの存在が知られていないことも理由のひとつと考えられるが、そもそも、盲導犬こそ大部分の医療従事者が認知しているとは言え、介助犬、聴導犬については認知度も低く、補助犬法に至っては未だ認知度が1/2程度と低いために、医療機関が補助犬を受け入れる義務がある施設であることの認識が低いことが原因のひとつであろう。

マニュアルに関しては、自施設でマニュアルを作成していた施設もあったが、補助犬対応マニュアルとして、日本介助犬アカデミーが2004年に発行した盲導犬/聴導犬/介助犬身体障害者補助犬同伴受け入れマニュアル<医療機関編>(以下、介助犬アカデミーマニュアル)¹⁰⁾は、発行後9年が経過しているものの、補助犬および医療に関する非常に詳細な情報が掲載されており、今日も最初に参照すべき資料である。これに加えて、近年、補助犬及び医療機関の所轄官庁である厚生労働省に、公的な補助犬受け入れマニュアルの整備を求める声が多く届いていたことから、2013年6月に、厚生労働省の社会・援護局障害保健福祉部が、「身体障害者補助犬ユーザーの受け入れを円滑にするために～医療機関に考慮していただきたいこと～」(以下、厚労省マニュアル)¹²⁾を発行した。厚労省マニュアルには、具体的な受け入れ事例、職員研修の方法、他の来院者への情報提供の方法などがわかりやすく記載されており、今後、積極的に活用されるべき資料であると考えられる。

なお、透析施設は、急患を含む様々な疾患の患者を多数受け入れている病院とは状況が異なり、定期的に通院している透析患者がほとんどであり、また施設内の滞在時間が長い。そのため、他の患者に補助犬について啓発を実施したり、犬アレルギーを有する患者の状況などを把握しやすい環境にあると考えられる。このように、透析施設のみならず、各種医療機関では、その施設の特性を活かして補助犬使用者の受け入れに当たることが望ましい。

また、クリニックを対象とした調査は今回が初めてであったが、クリニックにおいても病院同様に補助犬を受け入れていることから、医療機関の規模に関わらず、補助犬の受け入れは可能であり、クリニックも準備を行う必要がある。

地域別では、今回調査を行った3県は補助犬が比較的多い地域であり、他の道府県では、補助犬使用者の受け入れ経験が更に乏しいことが予想されることから、補助犬対応マニュアルなどの資料を活用して、成功事例を参考に各施設で受け入れ準備を進めておくべきである。

V. 結論

透析施設は、補助犬を使用している透析患者の高い生活の質の実現のために、透析ベッドサイドに補助犬を同伴できる透析環境の整備に努めるべきである。そのためには、衛生的な透析環境の整備はもとより、補助犬対応マニュアル、補助犬同伴可標識、補助犬啓発ポスターな

どの資料を用いて、施設の特性を活かして、他の医療機関と同様に、補助犬法に基づく補助犬使用者の円滑な受け入れのための準備を進める必要がある。

VI. 謝辞

本調査の主旨に同意頂き、アンケート実施にご協力頂きました兵庫、福岡、千葉の各県の透析施設関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省(2009)『ほじょ犬もっと知ってBOOK』厚生労働省
- 2) 身体障害者補助犬法の施行状況に関する検討会(2006)『身体障害者補助犬法の施行状況に関する検討会報告書』厚生労働省
- 3) 三浦靖史, 岡田奈々, 近澤知乃・他(2010) 医療機関における補助犬受け入れの現状と課題. 日本補助犬科学研究, 4(1), 31-37.
- 4) 三浦靖史, 大中萌, 石川智昭(2012) 医療機関における補助犬受け入れ状況:3年間での変化と地域差の検討. 日本補助犬科学研究, 6(1), 41-48.
- 5) 総務省ホームページ(2010)平成22年国勢調査. 総務省 <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/index.htm#kekkagai>
- 6) 日本透析医学会(2010)2010年度版日本透析医学会施設会員名簿. 日本透析医学会
- 7) 厚生労働省ホームページ(2012) いろんな場所で会おうね. ほじょ犬. 厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/syakai/hojyoken/>
- 8) 日本身体障害者補助犬学会第1回学術シンポジウム(2007) 透析施設における補助犬の受け入れ. 日本補助犬科学研究 1(1), 11-23.
- 9) キリンファーマ株式会社(2008)『KIRINPharma and You秋号』エルゼビア・ジャパン pp.14-15
- 10) 医療機関における補助犬同伴受け入れマニュアル作成委員会編(2004)『盲導犬/聴導犬/介助犬身体障害者補助犬同伴受け入れマニュアル<医療機関編>』特定非営利活動法人日本介助犬アカデミー
- 11) 日本透析医学会統計調査委員会(2011)『図説わが国の慢性透析療法の現況 2011年12月31日現在』日本透析医学会 p.12
- 12) 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部(2012)『身体障害者補助犬ユーザーの受け入れを円滑にするために～医療機関に考慮していただきたいこと～』厚生労働省